道徳教科書の骨格

日光の猿や神戸の猪が傍若無人に暴れている。動物愛護精神が身についている人々は盗られても襲われても「キャーッ」と逃げるだけで何ら手を打たない。野性の動物だって厳しくしつければおとなしくなる。人は言葉を理解するからしつけは容易。道徳教育も的を射れば成果は上がる。

経営管理講座 312
染谷和巳

道徳教科書を作る際の留意点

最近増えている親の子殺し、子の親殺しは道徳の欠落が原因である。

親にしつけられなかった子。「人間みな平等、親子も平等」という考えの親は子と〝友だち親子〟になる。中学生くらいになると子は怖いものなしの怪物に成長する。親を支配し、ある者は親を殺す。また耐えられなくなった親が我が子を殺す。

しつけられずに育った人が大人になり家庭を持つと、子の泣き声が疎ましくいらだち、小学生くらいになって言うことを聞かなくなると腹を立てて暴力を振るい、殺してしまうこともある。

これは道徳の欠落の極端な例であるが、ここまで行かないまでも道徳が身についていない人は公序良俗に反する行いをして社会の秩序を乱す、目上の人を尊重しない、盗む、姦すなどの犯罪を犯す、など社会に迷惑をかける厄介な存在になる。

よって道徳教育は大事である。

では家庭で親にしつけられなかった子が、学校の道徳の授業で道徳を身につけることができるのか。できる。

結論は「できる」であるが条件がある。先生に指導力と道徳を教える情熱があれば、適切な教科書があれば。この二つの条件を満たせば効果はあがる。

ここではまず「適切な教科書」について考える。

中央教育審議会は「道徳教育の充実を図るためには、バランスのとれた多様な教科書、充実した教材が不可欠である」と述べているが、「多様な」とか「充実した」という表現は危険である。

道徳の根幹は愛国心である。反国家の道徳教育はあり得ない。「多様な」「充実した」と広い範囲に渡れば、現在の社会科や歴史の教科書が、中国人的韓国人的日本人によって作られているように、国を貶め、祖先をないがしろにする教科書が出てくる可能性があるからである。「可能性がある」ではなく必ず出てくるからである。道徳の授業は「反日」の歴史教育同様、子供をさらなる怪物にしかねないのである。

識者は「教科書は学校関係者だけでなく保護者も関心を持ち、教育委員がしっかり議論して採択すべし」と警告している。おっしゃるとおりだが、その教育委員や学校関係者に「道徳教育は価値観の押し付けになるから反対」の個性尊重民主的教育派や日本より中国韓国のほうが好きな人が数多くおり、そうした人が教科書作りに参加するのだから偏向はまぬがれないし、たとえバランスのとれたいい教科書があっても選ばれないケースが多いだろう。

いじめや虐待があると先生方は口を揃えて「命の大切さを教えます」「人権を尊重する人に」と言う。こうした教育では加害者の心は直らないし、被害者の心の傷も直らない。

個性尊重、自由でのびのびの民主的教育もしかり。これは一%の天才のための教育法であり、九九%の普通の人には適さない。先生方がこれを全体に適用するから、わがままな人、依存心の強い人、自立しない人が増えているのである。

つまり「命の大切さ」「人権」「個性尊重」といった耳ざわりのいい言葉を道徳教科書の主要項目にすれば、道徳の授業は失敗に終る。

これらを柱にしたがっている教科書作成者やその教科書を支持採択する関係者を、道徳教育の場から一掃しなければならない。これが道徳教育の出発点である。

おとぎ話とイソップでいいか

結論から言うと道徳の教科書に〝新作〟はいらない。

誰かに頼んでこれから作ってもらうと、「子供が興味を持って学べる面白いお話」を連ねた子供迎合型や、道徳の枠外の「子供は自ら生き自ら成長する力があるのだからその自主性を尊重して見守ろう。大人が強制的に指導するのは子供のためにならない。子供は自分で気付いて壁を乗り越えて行く」という灰谷健次郎の小説「天の瞳」型の教科書が出てくる。

文科省の役人はかつてこうした考え方で学校教育を進めてきた。今もこの類の教科書を支持するに違いない。

では「うさぎとかめ」「浦島太郎」「舌切り雀」などのおとぎ話、イソップの寓話、そして二宮金次郎や野口英世などの偉人の物語を道徳教科書の柱にするのはどうか。

新作の子供迎合型よりは百倍よろしい。おそらくこうした教科書が作られ選ばれるだろう。戦前の修身の教科書もこのようなものであった。

おとぎ話や童話はわかりやすくて面白い。

たとえば「うさぎとかめ」はうさぎが「油断するな」「うぬぼれるな」を教え、かめが「能力が低くてもまじめに努力すれば優秀な人に勝てる」と教える。

これを教材にするなら、先生に指導力、広い視野の説明力が求められる。

社会人として求められる能力、たとえば仕事能力はペーパーテストの成績の優劣では計れない。学校秀才と鈍才という条件だけでは仕事能力の優劣はつけられない。もっと他の手先の器用さ、すばしこさ、思考力、応用力、人に好かれる器量などのほうが仕事能力に深く関わっているからである。

凡才も努力を続ければ二年三年浪人して東大に入れるが、秀才は現役で入学、追いつくことはできない。その後社会に出て凡才が出世し秀才に勝つことはある。だからといって凡才は学業成績において秀才に勝ったことにはならない。

遅れている子に「努力すれば勉強で秀才を追い抜ける」と教えるのは現実的でない。いい先生なら「努力して人並みの基礎学力を身につけておけば、社会に出て成功して秀才を追い抜くことができる」と教える。

利口なかめとばかなうさぎのこの話は付録の副読本にふさわしい。

また、イソップやグリムの寓話は欲張り、嫉妬、意地悪、怠け者など人間の醜い本能を風刺しており、やはり先生の柔軟な解説があれば副読本として活用できる。

ただし、おとぎ話にせよイソップ寓話にせよ、結末を「めでたし、めでたし」に変えた軽薄な弱者保護作品は使わないこと。

古典を脚色粉飾する権利は誰にもないのに、「仲直りした」「殺さず命を助けた」「謝まって許してもらった」と変える。この〝作家〟は反道徳思想の人である。

日本の軍人兵隊は道徳の鏡だ

偉人英雄の伝記や物語はどうか。道徳の最高位は「国のために命を捧げる」である。人類のため、地球のため、宇宙のためという〝グローバル〟な視点もあるが、自分の国を放り出して世界のため（ヨソの国のため）に働く人は道徳欠落者である。

私たちは国土と祖先のおかげで今ある。ならば国土と子孫のために尽くす、命をかけて守り戦う、これが使命である。これが道徳の太い幹である。「正直であれ」「約束を守れ」「思いやりを持て」などはこの幹から出る枝である。

道徳の教科書に適する偉人伝は軍人、政治家のもの。

西郷隆盛、伊藤博文、大山巌、乃木希典、東郷平八郎、犬養毅、山下奉文、今村均、栗林忠道、東條英機、吉田茂、そして戦争で国のために命を捧げた多くの軍人兵隊の伝記である。

政治家や明治時代の軍人はいいが、昭和の軍人を採用できるか。道徳教科書が本物になるか偽善物になるかはここが分れ目。

特攻隊兵士だけでなく戦争で戦った軍人兵隊はみな〝道徳〟が身についていた。その言動は道徳の具現であり、道徳の見本である。教科書に最もふさわしい。

ところが「軍隊は悪、軍人は悪人」という東京裁判史観をすり込まれた私たちは、国のために命をかけて戦った軍人を偉人として尊敬しない。その立派な功績を正当に評価しない。優れた人間性（知識教養人格）の持ち主であることを認めない。

教科書作りの関係者や文科省の役人が〝道徳の鏡〟のこうした人を取りあげれば素晴しい教科書ができる。そうでなければ偽善の空疎な教科書になる。

軍人政治家以外で道徳の教科書の柱となる人物は、以前小学校のどこの校庭にもたき木を背負って本を読む姿の像があった二宮金次郎だけだろう。

野口英世は女遊びが過ぎて借金だらけだったし、坂本竜馬は魅力ある人物だが、明治維新の英傑の中で過大評価されている。

偉人の伝記や歴史小説は道徳教科の副読本。副読本は子供の読書の対象である。授業でこれを教科書として使うのではなく、宿題で読ませて感想文を提出させるのがよい。